ハ、戦争は終わった　―ある副官の手記―

（著者　久米滋三）

以上三冊の戦友会資料に基づいて系統立て、また正確も期しました。御了解下さい。

南支で戦い続けた
鳳　歩兵第百六十一連隊

岐阜県　谷口　二一一

―谷口さんは何年生まれですか、連隊は岐阜でしたか。

私は大正十年生まれですので昭和十七年に入隊の予定だったのですが、昭和十八年の四月十日、岐阜ではなく鳥取の中部第四十七部隊に入営したので随分驚きました。後で聞いたのですが、岐阜連隊に補充兵が入って兵舎が満員だったためでした。

お蔭で、砂丘の所の粗末な兵舎でした。鳥取の連隊の人は砂丘での訓練で大変苦労したと聞いていましたが、土の上と違って足は砂にめり込んで足腰が鍛錬される訳です。しかし、二十日ぐらい兵舎にいて、大した教育はなく直ぐ現地へ出発となりました。

原隊の南支から、初年兵宰領者の将校と他に下士官が二人、大隊からそれぞれ来ていました。五月十八日に命令が出て鳥取を出発、宇品港から出帆して広東の入口、黄埔へ着いたのです。

黄埔の港から列車で広東へ、西村という所の第百四師団（鳳兵団）の司令部到着、私たちの第百六十一連隊は南村にあって、第二大隊第七中隊に配属、そこで初年兵の教育を受けました。我々の団体の岐阜県の幹部の岩田さんの次弟秀信君と一緒だった。彼は中隊は違ったが同じ高山出身で、体の大きいゴツイ人で、ドラム缶を担げるのはあの人ぐらいだった。中隊は違っても同じ大隊でした。

広東も雨季に入っていて雨の日にはなかなか会うことも無かったが、同郷の彼もいることで、お互いに何んとなく心強かったですね。

―鳳兵団は大阪師団管区だったのですが、名古屋師

団管区に変わったのですか、古年兵は関西の人ではなかったですか。

私たちの前は和歌山県だったようですが、昭和十四年組の古参兵もいてビックリしました。七年兵ですからね。一年余り教育を受けて、大分気候にも、外地の軍隊生活にも馴れた頃、例の湘桂作戦が開始されたのです。

湘桂作戦は前段第一期で「南支の第二十三軍は、六月末有力な一部で北江に進攻して中支の衡陽占領を牽制し、次の梧州作戦の準備をする」というものだったと後になって聞きました。その有力な一部というのが鳳兵団だったのです。

これも戦後、部隊史などで知ったのですが、我々歩兵第百六十一連隊と、山砲兵一中隊、工兵一小隊、野戦病院一班が「清部隊」と呼ばれた。六月二十四日、日没後、蚌湖集結地出発ということで、縦隊になって行軍し、北江渡河の時は後方だったので敵の抵抗は受けなかった。しかし、清遠を通り過ぎ、松岡では第一小隊長以下八名が戦死しました。

昭和二十年の韶関作戦の時も相当な抵抗を受けたが、それより、連江に近い所の松岡の敵の方が強くてキツかった。敵はまともに抵抗した。初めの戦いはお互いに準備をして、覚悟をしているから、その均衡を破るまではお互いに負けられないから大変なのですね。私達も湘桂第一期作戦が初陣でしたから。だから、後の韶関戦より犠牲が多かったのです。敵は日本軍と同じ戦法で山の上から奇襲はするし日本軍のお株を取っていた。大和魂は日本人だけではなかった。お互いに負けられない、任務のためには命がけですからね。

湘桂作戦中の我々鳳の歩兵第百六十一連隊で、岐阜県出身者の戦没者は七二九名です（資料あり）。

第二大隊は、六月三十日三時頃、太平市南方で尖兵中隊が夜間突撃を敢行してこれを撃退したが尖兵長以下三名が戦死した。太平市に突入占領し同地付近を掃討しながら、一日夕方廻蘭市に到着した。そして清遠西北の敵を攻撃。二日敵の抵抗を排除して高地を占領した。八月九日、英徳県合水口東方の戦闘では五人戦死と負傷後死亡が八人（岐阜出身者）、他に和歌山県

の古参兵もいる。一期作戦が終わって次期作戦のため集結したのは四会でした。

―第二期作戦は本格的な広西省の航空基地の攻略戦となるのですが、何時、何処から出発したのですか。

第二期作戦は太平市付近を九月九日頃出発しました。川上連隊が挺進団となって進撃する計画でした。この計画によれば、

「一、軍ノ企画―軍ハ九月上旬ヨリ攻撃ヲ開始シ先ツ梧州、丹竹付近ニ進出シ爾後ノ作戦ヲ準備ス……、

二、第百四師団ハ清遠付近ヨリ四会ヲ経テ西江北岸ノ敵ヲ撃破シツツ途中肇慶ヲ攻略シテ梧州ニ進出ス。特ニ一部ヲ以テ北方ニ迂回セシメ懐集、信都ヲ経テ梧州ニ進出セシム」

と戦史に記されています。

我々の連隊が進撃、四会を通って徳慶―梧州へ入った時は川上連隊が既に梧州を占領していました。梧州付近で我連隊は余り戦闘はなかった。梧州を出てから、梧州―龍巷間の道路構築したのですが、西江河岸の崖を切り開いた。しかし、雨が降ると道は泥となって膝まで浸っての作業は大変なうえ、昼間は河に沿って敵のP51戦闘機が低空で飛んで、道路工事の連隊の兵隊や、河を遡る船に銃撃を繰返し、作業は仲々進まない。しかも銃弾が当たると口径が大きいので、大部分は出血多量で戦死とか、足などは腿が後向きになったり、切断されてしまって随分悲惨でした。そのため道路作業は、第一線の戦闘より困難であったので、連隊の兵士は、早く第一線に出て柳州攻略に出発したいと、その日の来るのを待ち望んだ程です。

―次に柳州攻略についてお話をして下さい。

柳州攻略は我々の歩兵第百六十一連隊が単独で三江墟から山地へ入ったのです。山地の名は猺山系といって、先人未踏の山で、地図も猺山の部分は真っ白です。空白になっているから地図が無いのも同じです。我々兵隊は猺山と言わず「猫山脈」といっていた。その猫山脈へ登りかけたのは十一月三日でした。

山中は人間がやっと通れるほどの獣道というか鹿道というだけです。この道なき道を進むのだが、峻険と

いう文字通りです。馬は駄目で通れない。もっとも馬は梧州のあたりで半分やられてしまった。

ここの住民苗族は少数民族で、誰言うとなく尾の生えた人種だと噂話さえある剽悍な性格で、猿のように素早く、つねに蛮刀を腰にして、通り魔のように走り去る種族だった。地図がないのだから指揮官は、夜は星、昼は磁石頼りの三日間でした。何故このような山中を突破したかというと、柳州防御の敵の意表をつく、挺進突撃だったからです。「柳州攻略は南支軍で」という固い決意が、第二十三軍にも師団司令部にあったからでしょう。　柳州突入先遣大隊は第三大隊で、道県へ降りたのは十一月五日でした。我々が見たのは、立派な道路に敵戦車のキャタピラの跡がいっぱいあったことですが、戦車の姿はみえませんでした。しかし、これを見て私達は、今度はやられるぞと思い、いよいよ戦闘だと覚悟しましたよ。

先遣の第三大隊は象江を強行渡河して、柳州飛行場に向かおうとしたのですが、渡河材料は無く、ようやく民船二隻を見つけ、悪戦苦闘の渡河だったと聞きました。第三大隊が柳州飛行場へ突入したのは十一月九日十時だと記録されています。これで、南支軍の面目が立ち、中支軍と一挙に柳州攻略をしたわけです。

第三大隊でも、第十中隊が一番損害を受けた。私は夜になって向こうから部隊が来るので、「何中隊か」と声をかけたら「七中隊だ」という。私も第七中隊なので、よく聞いたら中支軍の第三師団（幸兵団）だった。それは九日の晩でしたが、翌日十日の朝は柳州飛行場が見えた。

その時、飛行場に飛行機はあった。えらい所へ来たなぁというのが第一印象でした。今も中した通り。柳州へ入ったのは中支軍よりうちの第百六十一連隊が少し先だったので、第二十三軍の面目を保つことが出来たわけだが、無我夢中ですよ。

柳州では駐屯中に敵の機銃掃射でやられた。我々は半月ぐらい柳州にいたと思うが、こっちは南から来たので夏の半袖シャツ（防暑襦袢）一枚、下着なしで寒かった。南支といっても柳州は北の方、十二月近いのに防雨外套一枚だけです。それに引替え、中支軍は服

を着ているからいいなぁと思ったですよ。柳州では、岐阜の初年兵ばかり五人死んでいる。

＊「柳州の地誌」を次に参考として記す。

柳江が大きく曲折して流れる所にある地方都市で、城の南岸に馬鞍山がある。北方まで数個の孤丘があるが、遠くまで柳州平原が延び拡がっている。

市街は柳江により馬蹄形に囲まれ、背後には石筍（南画にあるような）のような岩山の絶壁を負うている。人口は約三万人で新市街は文化都市として立派なもので、市の周囲には、五魚峰・峨山・文筆山他二十余の奇峯が群立し景趣に富んでいる（桂林のように）。

軍事的には、貴州・雲南・湖南・広東の各省に通じる通路の中心。重慶軍第四戦区司令部の所在地で、軍事上極めて重要地点であるのみならず、柳州飛行場・機械廠・空軍学校等の軍事施設並びに重要機関がある。

商業地としても梧州、南寧に次ぐ市場で、産物の主なものは米、甘蔗、落花生、玉蜀黍、芝麻等があり、更にこの地の棺材（棺は柳州と言われた）は極めて有名である。故に古来「死は柳州」という言葉があったくらいである。

飛行場は、支那事変後莫大な費用をもって拡充され、江西省の南昌飛行場につぐ、大飛行場で、桂林と共に米支空軍の重要な設備が施されていた。

―続いては、湘桂第三期の作戦韶関攻略戦となるわけですが、何時頃反転したのですか。

桂林・柳州攻略は湘桂作戦の大きな目的であったのですから、梅津参謀総長は十一月十一日、戦況奏上に際し、柳・桂攻略に関し奏上したところ、御嘉尚のお言葉があり、次いで支那派遣軍総司令官及び支那方面艦隊司令官に優渥な勅語を賜ったといいます。

連隊は、柳州付近の警備を中支軍と交替し、柳州―来賓―武宣―平南を経て、十二月九日梧州に集結し、同地から韶関攻略のため行動発起の内命を受けたようです。十五日に梧州を出発、西江に沿って南下、下旬に四会に到着、同地周辺に集結をした。

昭和二十年、四会で正月をやって四ヵ月分の英気を

養っていたが、その間、敵将余漢謀の反撃はありませんでした。一月十七日、いよいよ、韶関攻略のため四会を出発したのです。先遣大隊となったのは、第百六十一連隊の斎藤清二大尉統率の我が第二大隊でした。我々は軽装備で、兵器と雑嚢だけ、大隊砲と第二機関銃、野砲一個中隊、工兵一個中隊、輜重、野戦病院が配属された。

十九日夕方、先遣の我大隊は三坑墟を出発し、強急行軍、昼夜兼行で北進したが、突入はたしか一月二十一日だったから、その間はただ歩くだけだった。北江の対岸には第三大隊の第十中隊が配属になり、第二大隊の指揮下に入り、我々第二大隊の主力と、お互いに先陣争いをした。

韶関突入は本当の戦闘だったと思う。トーチカが並んでいて銃眼からバリバリ射ってくる。渡河しなければ攻略出来ない。山砲が到着するまでは渡河を何回やっても失敗。北江が武江と禎江に分離している点に中州があり、その中州全体がトーチカで固められていた。トーチカ陣地は強固に造られている。

曲江大橋は一月二十四日に爆破されてしまい、その音響があたりをふるわせ、火煙が夜空に立ち込めるのが望見された。渡河は民船を使ったが、敵の射撃と水流の関係で下流へ下流へと流され一時はどうなるかと思う程だった。敵の抵抗は引き続いて強く、やられては流され、流されてはまたやられる。なにしろ着岸まで三日ぐらいかかった。

私は大隊副官の指示で、小隊長代理として渡河を援護の命を受けたのです。一個小隊ですから軽機関銃、擲弾筒だけ、河原で遮蔽物は殆どない。あの時はこれが最後かと思った。もうやけくそだったです。そんなことが認められたのか、私は乙種幹部候補生で下士官だったのが、甲種幹部候補生に昇格して、将校になったわけです。

私は斎藤大隊長にも可愛がられ、戦死した森小隊長の軍刀を貰った。関の孫六の名刀だったので形見として大事にしておったけど、終戦の時取り上げられ、「戻す」といわれたが、復員の時も返って来ないで、大変残念に思っています。

将校の補充は一年志願の古い人が、うちの第七中隊にも二人入っていたが、私も小隊長として頑張っていた。韶関での市街戦で、第二大隊の各中隊は、白兵戦を交えながら、逐次占領していた。二十六日払暁になり、粤漢線の鉄橋は猛然と火をふき、白煙を上げながら、敵の手で爆破され、敵は敗退していった。

二十七日、朝、第二大隊は富国炭田を占領せよと命ぜられ、我々の第七中隊は大隊と共に炭田へ向けて急進した。途中中支軍と連絡して南部粤漢線は打通したわけです。これで韶関攻略戦が終了したのですが、その後は敵の抵抗はなく、五日ぐらいで反転しました。敵の追尾も無く、三日間ぐらいで四会まで帰ることが出来ました。

韶関作戦で、我が方は約六〇名の戦死傷者を出したが、敵の損害は、遺棄死体約五〇〇、捕虜約七〇、機関車三、山砲三、曲射砲二、機関砲三、軽機関銃二〇、その他弾薬多数を鹵獲したと報告されていた。

＊「韶関の地誌」一般には馴染の少ない地名であるかも知れないが、曲江ともいう。広東の北方、北江上流にある都市で、北は筆峯山、北東から禎江、西北から武江の二水の合流する江瀬に接している。

民国以来、曲江県政府所在地で、軍事的には、支那軍第七戦区司令部（余漢謀将軍）の所在地である。水陸交通の要衝で、粤漢鉄道で北上すれば揚子江に達するだけではなく、江西・湖南省とも接近している。

広東との貿易（交易）は勿論、江西・湖南両省とも盛んに通商を行っている。広東北部の大商業地域で、人口約四万。集散品は広東より硝子・化粧品及び各種の外国品、湖南省からの木材、菜種油、茶油等の油類で、最も多いのは江西省の紙及び煙草類である。

韶関は単に商業的に見て重要なばかりでなく、江西・湖南・広東三省の境界点に近いという地理的重要性の見地から、古来戦争のある度ごとに、軍事争奪の的となっていた。

当連隊が占領した時は、支那軍のみが防衛に当たって、住民は全部疎開していたが、連隊の急進撃に、

市街地の物資まで疎開することが出来ず、米・砂糖・煙草・マッチ・炭・織物等が、各商店及び一般民家に多数残置されていた。敵の陣地内トーチカには、市街地から掠奪した物品が山積みしていた。

―韶関攻略後は海豊・陸豊地区での対米軍備作戦に入るわけですが、韶関反転は何時頃ですか、第百八連隊は韶関作戦に参加せず海豊・陸豊を占領していたのですか。

そうです。我々の百六十一連隊は、四月初め陸路で、昭和十三年バイヤス湾上陸し広東攻略した同じ路を逆に行ったわけです。その間敵機による空襲は度々ありましたが、艦砲射撃はありませんでした。

我連隊は両豊地区の中間地区隊となり、陸豊、海豊間の公路北側の高地を占領することとなり、連隊主力は中心の鳥面嶺（海豊東方八キロ）に位置しました。右の大嶂峯山に第三大隊、左法留山後方山地には我が第二大隊です。山は標高六〇〇メートルで、その土質は軟岩と硬岩で洞窟作業速度は一日二メートル程度の進捗度であった。

ずっとそこで陣地構築して山が変形するほど掘りました。全部人力で、十字鍬、円匙だけで、山の中はトンネルだらけ、地質がよいから落盤もなかった。大分苦力もつかって六月までで完遂したが、その間、食糧、病気はそれほど苦にならなかった。各隊、各分隊バラバラで山中陣地構築だ。艦砲射撃に対抗、敵前上陸に対抗するためです。

対米といっても、砲は海岸付近に主として配置され、一般中隊の兵器は小銃と軽機関銃のみで、いってみればゲリラ用でした。陣地は山の中腹だから洞窟生活だった。付近には民家はなかったが、毎晩、分哨勤務をして警戒させていて、周囲の治安は良かった。こちらが敵の陣地を攻撃するときは抵抗は強かったが、敵襲はなかった。食糧も充分とはいえなかったが、赤痢等の伝染病があるので、水は全部煮沸して飲んでいた。

六月になって、第二十三軍の中から二個師団（第二十七・第四十）が中支方面に転用になったため、師団司令部は海豊から恵州に移動した。我が連隊も血と汗で築いた法留山北方山地の洞窟陣地を後にし、十八日、

バイヤス湾地区に転進し、同地で再び洞窟陣地の構築（弁壁石山地帯）に全力を注いでいた。

その頃、中国人は「日本はサランパン（駄目）になった」と言うようになっていた。兵隊に対しても、日本は負けたと言っていた。こちらでは「山下将軍がフィリピンへ行ったから、七月は提灯行列だ」と言う人もいた。「いや提灯たたみ行列だ」と言う人もいた。終戦は、広東の放送局へ出ていた兵隊から聞いた。「十五日にどうも無条件降伏したらしい」と。これは連隊本部の連中から後になって聞いたことだが、私等は、山の中での作業中だから判らなかった。しかし、中国人の情報は我々より早くて、結局は正確だったわけです。

―直接敗戦を知ったのは、その後の生活はどうでしたか。

敗戦を知ったのは八月二十日頃だった「我々は負けていないのに何故日本は負けたのか」と皆、疑問をもったり悔し涙にくれていた。支那派遣軍総司令官も、派遣軍は負けていないので最後まで強硬に戦争継続を主張していたが、十五日午後、派遣軍全将兵に対し「承詔必謹以テ宸襟ヲ安ンジ奉ランコトヲ期ス」と決意を明らかにし「愈々厳粛ナル軍紀ノ下鉄石ノ団結ヲ堅持シ一途ノ方針ニ基キ夫々新任務ノ完遂ニ邁進スベシ」との訓示は、終戦後文書で見ました。

師団命令が出て、現態勢の陣地構築の場から撤収が命ぜられ、突然、博羅の北方地区に集結をすることになった。軍旗の奉焼は、八月三十日午前十時、集結地の博羅で行われました。連隊史によると、昭和四十年福井県小浜市の自宅で、最後の連隊長清水圓大佐は、「午前十時、東方遥拝して陛下にお別れした後、木部連隊旗手が捧持せる軍旗を下方ふさの方より点火して、全将校挙手の礼のうち奉焼した。菊の御紋章は完全燃焼しなかったので連隊本部へ持ち帰り、ヤスリで粉々に引き砕き、連隊将校全員に分け与えた。完全燃焼した灰は、榊の木の根元に埋めました」と戦記著者に話されたという。部隊幹部はじめ我々も、詔書を拝受して、詔書必謹といわれても、敗戦の意識は起らなかったが、軍旗奉焼により敗戦の現実に対処する気持

ちにようやくなったわけです。

その後は支那軍から糧秣を受領しての生活となったのですが、武装解除は十月八日でした。復員は昭和二十一年四月でしたが、その間は集中営と呼ばれる収容所での生活でした。支給食糧は段々と少なくなり、私物品を中国人と交換しながら生活を維持していたが、それも品薄となりました。

中国住民の日本軍に対する感情は複雑だったと思いますが、蔣介石総統の布告もあり、概して良かったといえるでしょう。復員は浦賀港上陸して行われたのですが、帰る途中の都市は焼けて廃墟となっている所も多く、「国敗れて山河あり」の詩文を思い出しながら故郷高山の地を踏んだのです。それにしても、同年兵を始め沢山の戦友が、南支の地に骨を埋めていることを今も想い出され、慰霊の心を持ち続けています。

戦争と軍医と衛生兵

神奈川県　永井収三

―簡単な軍歴をお聞かせ願えませんか。

朝鮮の大邱医科専門学校を卒業し、京城で教育を受け、昭和十八年八月、独立混成第二十二旅団独立歩兵第六十六大隊に配属になりました。その時の階級は軍医見習士官でした。

―それからずーっと大隊と行動を共にしたのですか。

そうです。大隊本部は廣州市の河南にありました。

中国における私の軍歴は大きく分けて三期間に分けられます。第一期は廣州市駐留の時期、第二期は湘桂作戦の時期、第三期は抑留時代です。

―廣東時代の思い出を一つどうぞ。

私は植民地の学校出なので、内地から直行した将校より中国に違和感は感じませんでした。それに本部勤